



大すきいっぱい西北の子

～学びづくり、くらしづくり、仲間づくり～

令和6年10月4日
長崎市立西北小学校
文責：校長 江原芳樹
R6 第6号

季節に気づいた彼岸花が慌てたように茎をのばし、赤い花を開いています。顔を出してみても、思った以上に季節が動いていることに驚いているようでもあります。私たちも季節の移り変わりの様子が変わっていることに驚いています。夏から一気に深秋に向かっている感覚です。短い秋となりそうですが、しっかりと秋を感じるようにしたいものです。

10月です。10月は、年度の中間地点を過ぎ、後半戦に入るときです。山登りでいうと次の山（次の学年）に向かうために頂上から下り始めるときということです。質として下るのではありませんので、子どもたちにとっては一度通ってきた道を歩むこととなります。つまり、自分たちにとって必要なこと、大切なこと、守らないといけないことを十分に理解しているということです。それでも時には、不十分さは出るものですが、後半戦はこれまで以上に、学校のくらしづくりを子どもたちが主体的に取り組んでくれるものと期待しています。

「学習状況確認日」について

今年度より、通知表2回制に取り組んでいます。学習内容を前期と後期に分けて評価することで、自身の学習状況についてしっかりと理解を深め、今後の学習への取組を考えていく機会とします。

西北小学校では、子どもたちの学習の在り方について、次の4つの視点で考えています。

N ねばり強く取り組み、自分を律する子

S 主人公となって学習を進める子

K 客観的に自分を把握できる子

T 他者とのかかわりの中で成長する子

※「に・し・き・た」のアルファベット頭文字になぞって、「N・S・K・T」で表現しています。

子どもたちの学習は学校内だけで行われるものではありません。社会に出ても、学習できる力が求められます。これから求められるのは、こうした「自ら学んでいこうとする力」です。現在は、学校という場が子どもたちにとって学びの場になることが多いのが現状ですが、家庭においても自ら学習していこうとする姿勢を高めていきたいと思ひます。

10月11日（金）には、通知表を子どもたちが持ち帰ります。成績に良し悪しだけでなく、どういう学びをしてきたのか、成績を結び付けて一緒に考えていただきたいと思います。また、以前もお知らせしたように、「家庭からの欄」には、家庭での子どもたちの学習の様子や保護者の皆様が子どもの学習について感じていることや不安に感じていることなどを記述いただきたいと思います。

さしすせそうじ名人

2 学期、西北小学校では、掃除の取組を高めようと取り組んでいます。落ち着いた学校生活のためには、静かに取り組む場面が必要です。その一つが清掃活動です。西北小学校では、「さしすせそうじ名人」と呼んでいます。「さっと、静かに取り組み、隅々まで気にかけて、整理整頓までしっかりやる掃除」という意味です。

現在、5・6 年生の掃除を手本にしようと下学年が掃除時間に高学年の掃除を見学する「さしすせそうじ名人見学会」を実施しています。見られる側の高学年にとっても、自分の掃除への取組を確認する場になりますし、下学年の子どもたちにとっては静かに素早く動いている高学年の姿は、まさに「手本」です。私たち教師がいくら掃除の仕方を上手に話しても、目の前にある手本にはかないません。どんな姿になりたいのか、高学年が示してくれています。



《校長散歩道 No. 1 7》

2016 年 3 月 16 日、「津久井やまゆり園」で入所者が刺殺された事件を鮮明に覚えている方もいるでしょう。「障害者」を理由に殺傷事件が起きました。事件を起こした植松被告が、報道のフラッシュの中、赤く光る眼で不吉に笑っていた姿が、この事件の異様さを象徴していました。

その植松被告に接見し、日頃困窮者支援に携わったきた奥田知志氏がこの事件を通して考えているコラムを目にしました。

その一部です。

植松君は、「障害者は親を不幸にしている。」と言いました。ですが、彼は「大変」と「不幸」の違いをわかっていません。世の中には、つらいこと、大変なことはあります。これをなくすことはできません。でも、それは不幸ではないのです。

人と人が出会うと、やはり傷つくし、大変なんです。家族といえどもそうです。でも、大変でも、人と出会うことに人の幸せはあるのです。絆は「きず」を含みます。人と人が関係を結ぼうとすると、どうしても傷つきます。でも、それを恐れていては社会がなくなってしまう。社会というのは、健全に傷つくための仕組みなのです。

私は子どもたちに「友達と仲良くしなさい。」と教えてきました。

そのことに間違いはないと確信していますが、同時に「傷つき、大変なこともあるけれど」という前提も教えていかなければならないと気付かされました。

人と人が顔を合わせ、表情や声色、雰囲気でも心情を理解できる時代ではなくなっています。画面の向こうの人とも付き合わなければならない時代です。

傷つかない方法ではなく、どう傷つくか、傷ついたらどうすればよいのか、それを子どもと一緒に感じ、考えられる大人でありたいと願います。